

こうづ りきお
神津 里季生

基幹労連・事務局長

流されていく時代との訣別を

働く者自身にとって大事なことは何か、ということ考えたとき、最も気をつけておかねばならないのは、「なんとなく時代に流されていく」ということではないかと思う。今ある幸せが永久に続くという錯覚、特段の努力を加えずとも続いていく、という錯覚であると思う。

私には、あらゆる問題・課題が時代の節目にあるように思える。我々が努力すれば素晴らしい日本を展望できるのかもしれないし、しかし一歩間違えばこれまでに想像もできなかった悲惨な日本を将来の世代に残してしまうのかもしれない。まさに我々は分岐点に立っているのではないだろうか。

格差の拡大の問題が叫ばれている。

しかしつくづく不思議に思うのは、実態としても格差が拡大していることは明らかであるのに、わが日本国民は今の小泉・安倍路線にあいも変わらず絶大な信頼を寄せているということである。綻びも見え始め、さすがに支持率は下がりつつあるが、絶対水準自体はまだ決して低くない。（注：12月9日現在）

お金がなくてもこれだけできるよ、暮らせるよ、というテレビ番組がはやっている。若いときだけでない、30代、40代になってもやっていけるの

かという視点がそこには欠けている。好きなことをやって、収入が低くてもかまわないと思っている。日常に流されてしまっている。目先だけの充足感による、漂う社会になってきているのではないか。

まさかとは思うが、「労働ビッグバン」などという愚かしい提案にも、唯々諾々と従うことになってしまいかねない危険性を、今の日本は孕んでいる。

ものづくりの力もまた時代の分岐点にある。

その最大のポイントは、人材の力、技術力・現場力は大丈夫かということである。製造業各社は極めて厳しいリストラの嵐をくぐってきたわけであるが、それでもなお高い技術力をつないできた。今の繁栄は、まだまだ遺産が残っていたからこそのものである。それをつないでくるために、現場・職場が必死になってこらえてきたからである。そこに中国の旺盛な需要等の外部要因が加わって、それらがあいまって空前の活況につながったわけである。

これから大量入社者の方々の層がごっそり抜けていく。産業や企業により多少のタイムラグはあるし、また60歳以降の就労者も相当な規模になってきているので、若干の歯止めはあるにしても、



トレンドとしてごっそり抜けていってしまうのはいかんともしがたい事実である。

また設備の問題にしても、この間の苦しい時代、つめに火をともしような現実のなかで、相当におろそかになっていることは間違いない。鉄鋼メーカーがユーザーに値上げの理解を得る際に、より良い製品を将来にわたって供給していくためには設備に投資が必要であるということが、ポイントの一つになっている。これは本当に、そのぐらいオンボロの設備、もちろん全部が全部ではないが、オンボロのものを我慢して使ってきた。限界に近いものがかかりあるということである。

いずれにしても、今やるべきことをやっておかないと大変なことになるとというのが実感である。

そして人材づくりということに話を戻すと、それは、ひとつものづくりの観点のみならず、わが国社会の基盤そのものに関わる極めて大きな問題である。大きな分岐点のさなか、というよりも既に相当程度悪い方に進んでしまったとって過言ではない。

「いじめ」の問題は言うに及ばず、年少者の犯罪の増加、学力の低下、教育者の不祥事、また家庭での教育不在等々、言い出せばきりがない。

政府も教育問題への対処を柱の一つに掲げているし、マスコミも、連日の報道にいそしんでいる。しかし、なぜかしら、そのどれもが中途半端な議

論に終始しているように思えてならない。先に触れたものづくりの問題であれば、問題や懸念材料は様々あれど、進むべきベクトルは定まっている。しかし、この教育の問題は、深刻な問題だ、なんとかしなければならぬ、というところまでは衆目が一致するが、肝心のベクトルが全く定まらない。

安倍政権は、実にそのこのところをうまくついているように私には思える。なんやら会議をいっぱいつくって、目立つ人たちをいっぱい集めて、私は改革しますよ、という見せ方をうまくやっている。

今の与野党の力関係や、国民の危機感をうまく利用したやり方からすると、形だけの教育改革がそのままずっと進行してしまうのではないか。しかしそれは本質的な改革につながらないどころか、改悪になる可能性が大きい。

「美しい国」という表現に象徴されるがごとく、なかみの問題に明確さを持たない、イメージ先行の安倍流手法は極めて危険だと考えざるを得ない。本質論・なかみを置き去りにして、形から入る愚を許してはならないと考える。